

清和天皇皇女 孟子内親王

皇女研究会

孟子内親王は清和天皇の第一皇女で生母は中納言藤原諸葛女である。外祖父、藤原諸葛は藤原南家の系統の出身である¹⁾。

孟子内親王には同母兄妹はいないが、諸葛の同母弟である諸藤の娘がやはり清和後宮に入っており、貞眞親王を産んでいる。

清和天皇は周知のように大勢の皇子女がおり、生母の出身によつて一部は臣籍降下された。孟子内親王は傍流とはいえ、生母が藤原氏出身であるために、親王宣下を受けたと考えられる。『三代実録』貞観十五年（八七三）

四月二十一日に孟子が親王となつたときの状況をみると八名が親王、四名が源氏に賜姓されている（表1参照）。

孟子内親王自身の記事はこのほかには『三代実録』元慶二年（八七八）六月二日に荒廃田を賜つた記事²⁾と『日本紀略』延喜元年（九〇一）六月二十七日の薨去の記事

だけである。

表1

親王名	生母	
貞固親王	橘氏	治部大輔休蔭女
貞元親王	藤原氏	参議治部卿仲統女
貞保親王	藤原氏	故中納言長良女
貞平親王	藤原氏	右中弁良近女
貞純親王	王氏	中務大輔棟貞女
孟子内親王	藤原氏	兵部大輔諸葛女
包子内親王	在原氏	参議左衛門督行平女
敦子内親王	藤原氏	貞保同母
皇子名	生母	
源長猷	賀茂氏	越中守岑雄女
源長淵	大野氏	前石見守鷹取女
源長鑑	佐伯氏	信濃権介子房女
源戴子	賀茂氏	長猷同母

清和天皇には判明しているだけでも二十六名におよぶ皇妃がおり、その子女は三十名を超している。孟子内親王は特に内裏で養育されたという記述もないので、里第で養育されたと考えられる。そこで外祖父藤原諸葛の足跡を辿ることによって、内親王の生涯を推測したい。

外祖父諸葛は『尊卑文脈』によると、右大臣、藤原三守の長男有常の子で、同母弟に諸藤、異母弟に諸房がいる。国史の初見は『文徳実録』嘉祥三年（八五〇）十月五日、「参議従四位上伴宿祢善男侍従五位下藤原朝臣諸葛向深草山陵」というものである。同年八月に瑞祥があつたことを各地の山陵に告げる使者の一人で、伴善男とともに、仁明天皇の山陵へ派遣された。しかしながら同じ『文徳実録』仁寿三年（八五三）正月七日の叙位で、藤原朝臣諸葛は正六位上から従五位下となっており、斉衡元年（八五四）五月二十二日に次侍従になった記事がある為、何らかの錯誤があつたものと思われる。

斉衡二年（八五五）に加賀権介となつた後、しばらく散位であつた。その間、天安二年（八五八）八月二十三日に文徳天皇が崩御し、わずか九歳の清和天皇に代替わ

りした。老練な良房が後見しているとはいえず、幼帝の即位により、しばらく政局に緊張状態が続いたことは想像に難くない。清和天皇が十一歳となつた貞観二年（八六〇）十一月に諸葛は従五位上となり、三ヶ月後の貞観三年（八六一）二月二十五日に散位から中務少輔となつてゐる。同年四月九日には少納言となつた。諸葛はこの時三十六歳。諸葛の官歴でもこの時期のものは際だつており、清和天皇、良房の体制を固める官吏の一人となつたものと考えられる。

貞観六年（八六四）一月、清和天皇は十五歳で元服した。順当に考えると諸葛女が入内したのはこれ以降ということになる。貞観八年（八六六）三月右大臣藤原良相の邸宅に天皇が行幸し、花見が催され、大枝音人や基経等と共に諸葛にも叙位があり従五位上から正五位下となつた。行幸の随行者に対する叙位である。同年閏三月十日に応天門が炎上する。この一連の事件は伴善男だけでなく、良房の弟良相などが関わっているなど諸説あるが、清和天皇を戴く良房・基経の政権が盤石なものではなかつたことは確かである。

貞観十五年（八七三）四月二十一日に皇女孟子が内親

王となつた折、諸葛は兵部大輔であつた。藤原良房は前年に亡くなつていたが、基経は右大臣となつており、その上には左大臣源融がいるだけであつた。諸葛は同年十月には従四位上となり、中将を兼務、大原野社使を勤めている。清和・陽成・光孝・宇多と四代にわたつて仕え、代替わりにあつても特に左遷されることもなく、勤めている。陽成天皇の代には相撲司（右司）を勤めており、孟子内親王も一身に限るが、三河国に一百町の荒廃田を賜つた。

『三代実録』元慶二年六月二日条

六月乙丑朔。二日丙寅。勅、以三河国幡豆郡荒廢田一百町、賜孟子内親王、為一身田。

内親王に対するこうした配慮は陽成朝にあつても、諸葛等が決して粗略に扱われてはいないことを示している。陽成天皇が元慶八年（八八四）二月に讓位し、同じ年の十月に光孝天皇が紫宸殿において催した宴では、天

皇の勅により弟諸藤とともに琴を奏している。

『三代実録』元慶八年

冬十月戊子朔。天皇御紫宸殿、賜宴群臣。左右近衛府通奏音楽。勅、令参議右衛門督藤原朝臣諸葛、前伊勢守藤原朝臣諸藤兄弟、弹琴為歌。日晚、賜禄各有差。

諸葛が琴を弾いた記事は仁和二年（八八六）十月二日にもある。

『三代実録』仁和二年

二日丁未。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。太政大臣及参議已上並殿座。六府奏番上簿於庭。右近衛府通奏音楽。酣暢之後、勅命参議右衛門督藤原朝臣諸葛、弹和琴。王公並作歌。天皇自歌、宴樂畢景。

このときも勅命が下され、諸葛が和琴を奏し、天皇をはじめ居並ぶ公卿たちが歌を作っている。

この後も諸葛は順調に昇進し寛平元年（八八九）まで

右衛門督を拜し、一年おいて寛平三年（八九一）に正四位下、中納言に任ぜられた。時に諸葛は六十六歳。『公卿補任』では翌年からは諸葛の欄には中納言以外の官職の記述がない。位は従三位と考えられる⁴。このときの中納言は源光（仁明皇子）と諸葛の二人であった。光はまだ四十代後半である。寛平六年（八九四）になると中納言に藤原時平（二十四歳）が加わり、三名となる。そして翌七年（八九五）七十歳になった諸葛は正月に官を辞し、六月に亡くなった。

清和天皇の後宮については角田文衛氏が良房の策略を語る事例として、清和天皇の好色な性格を奇貨として、後宮に続々と女性を送り込み、天皇を政務から遠ざけたとする説を肯定する意見が大勢を占めている⁵。桓武天皇も後宮が華やかで皇子女が多いことではひけをとらないが、それは在位二十五年、享年七十でのことであり、清和天皇のように十五歳で元服後、亡くなるまでのわずか十二年間という短い期間ではない。したがって角田氏の見解も尤もである。しかしながら、良房がもっぱら権力独占のために清和天皇に女性を薦め政治から遠ざけ

たという説は今一つ納得しきれないところがある。摂関政治とは天皇家と藤原氏を両輪としたもので、天皇をないがしろにして成り立つ体制ではない。また、清和後宮を一瞥すると、良相の娘多美子を筆頭として、良房とただちに競合するような有力者（含源氏）を父に持つ女御には一人も子がない。清和天皇は決して無計画に后妃を遇しているとは思えないのである。良房が後見する高子、基経女の佳珠子の皇子女その他、十五名もの皇子女はすべて更衣腹以下である。弱小な一族から娘を入内させる意義としては、天皇との個人的なつながりを介して互いに結びつき、政權を担う一団を形成しているとも考えられないだろうか。南家出身の諸葛や弟の諸藤が娘を入内させる意義は清和天皇との個人的な結びつきをもとに良房・基経を支える官僚としての立場を確たるものにするものであったと思われる。孟子内親王や貞眞親王はそれを象徴する存在であったと考えられる。

大塚徳郎氏は平安初期の政治状況について「主体的勢力の形成をめざす藤原氏の攻勢と、源氏、旧氏族の出身者、文人政治家等の対抗、勢力争いの時代が続くが、文

人政治家の動きは個別的で、族的結合を構成し得なく、ただ、天皇との個人的な結びつきによって立身するという形をとっている弱さが、また源氏においても、天皇の子あるいは孫ということによつての立身で、これまた族的結合をなし得ないという弱さがあり、藤原氏の如き強固な族的結合に対抗し得なくて、菅原道真の如き悲劇を招いたとみられる」と述べている。傍流の藤原氏にとつても天皇との個人的な結びつきが藤原北家隆盛の中にあつては重要な意味を持っていたと思われる。

孟子内親王は、『本朝皇胤紹運録』『帝王編年記』では皇女の筆頭に書かれている。「孟」の字には第一義に「かしら」「長男、長女」という意があることから、清和天皇の娘のうち、一番はじめに生まれた為の命名かと考えられる。そうすると、諸葛女の入内は早い時期で、先にあげた清和天皇元服の貞観六年（八六四）から諸葛叙位の貞観八年（八六六）の頃の可能性が高い。今一つの可能性としては、孟子内親王が誕生直後に親王宣下を承けたとするもので貞観十四年（八七二）ということになる。また孟子内親王の従兄弟にあたる貞眞親王の生が

「更衣」と明記されているので、おそらく諸葛女も後宮の身分は更衣であつたと思われる。

『三代実録』貞観十八年十一月二十五日条

戊戌廿五日。皇子貞眞年一歳。貞頼年一歳並爲親王。貞眞親王母。更衣齋宮頭從五位上藤原朝臣諸藤之女也。貞頼親王母。更衣木工允正六位上藤原朝臣直宗之女也。

『日本紀略』による孟子内親王の薨去の年は延喜元年九〇二六月二十七日。先の推定からすると三十六歳から三十八歳ほど、若くて二十九歳ほどであつたことになる。外祖父諸葛は内親王に先立つこと六年前の寛平七年（八九五）六月に七十歳で亡くなった。諸葛亡き後は、その長子である玄上（ハルウラ）が内親王を大切に庇護したはずである。従兄弟の貞眞親王もまだ存命であつた。余談ではあるが『尊卑文脈』には藤原玄上の傍書として「玄上事」「比巴上手 哥人」「此器即付琵琶主本人名字日本靈宝也」と書かれている。琵琶の名器として名高い「玄象・玄上」は一つの琵琶とも別の琵琶ともい

われるが、『禁秘御抄』は「玄上」の号は玄上宰相が延喜の帝に献上したからだとする一説を伝えている。『尊卑文脈』の傍記と併せると、琵琶の玄上は藤原玄上が所持し醍醐天皇に献上したものであるという説が信憑性をもって伝えられていたということになる。『三代実録』貞観九年（八六七）十月四日条には藤原貞敏が遣唐使として承和五年（八三八）に唐へわたった折、劉二郎という名人から紫檀紫藤琵琶を各一面譲り受けた記事がある。この記事自体では特に琵琶の銘は伝えないが、『禁秘御抄』ではこのうちの一つが玄上であるとしている。藤原貞敏は藤原京家の流れである。

諸葛・諸藤兄弟の弾琴の記述といい、玄上との記述から管弦の才がある血筋であったことは間違いない。したがって孟子内親王の暮らす里第では音楽が身近なものであったと思われる。また諸葛の舅にあたる橘永継の弟が能書で有名な橘逸勢である。諸葛は妻も母も橘氏で深い縁があった。こうしたことから孟子内親王の近辺には音楽や書など文化的な雰囲気満ちていたことと想像される。

- 1 藤原南家武智麿五男巨勢麿五男眞作を祖とする。
- 2 『日本紀略』にも同様の記事がある。
- 3 『平安時代史事典』資料・索引編（平成六年・角川書店）
- 4 『公卿補任』寛平四年
- 5 角田文衛『王朝の映像』「良房と伴善男」九五頁（一九七〇年・東京堂出版）
- 6 大塚徳郎『平安初期政治史研究』（一九六九年・吉川弘文館）
- 7 清和天皇元服後まもなくの入内、一年後の誕生とした場合。
- 8 『尊卑文脈』には「ハルウラ」とフリガナされる。
- 9 貞真親王は承平二年（九三二）九月二十日になくなった。五十七歳。『尊卑文脈』による。

●史料

※は私の注記、（ ）は割注

▼『尊卑分脈』

孟子内親王 母中納言藤原諸葛女

※皇女の筆頭に書かれている。

▼『本朝皇胤紹運録』

孟子内親王（母中納言諸葛女）頭注、紀略、延木元年六月廿七日、孟子内親王薨

※内親王の筆頭に書かれている。

▼『帝王編年記』清和天皇の項

皇女孟子内親王（母藤中納言諸葛女）

※皇女の筆頭に書かれている。

▼『一代要記』清和天皇の項 通記第二 一代要記乙集皇女

孟子内親王（昌泰四年六月二十七日薨）

※皇女の欄の四番目に書かれている。

▼太田亮『皇室御系図』清和天皇

孟子内親王（三實）宣子（紀略）。母藤原諸葛女（三實）。延喜二十二年二月薨（紀略）。
※内親王の筆頭に書かれている。
※『紀略』では延喜元年薨去となっている。

▼『三代実録』貞観十五年（八七三）四月廿一日

廿一日乙卯。勅曰。朕以涼德。辱此守文。待化未孚於豚魚。用心徒形於。唯深蒼生爲子之德。不慊螽斯則百之福。而今心事養。男女繁昌。當分茅土之重。多致帑藏之費。寤寐頽愁。心魂罔措。若涉洪水而无舟楫。但弘仁以降。載代遺蹤。或作親王。或爲朝臣。尤是損上益下之大義。屈躬利物之通規。朕之不德仰慚前良。因願頗變舊章。愍爲源氏。然而事當師古。義貴宜今。故其不獲已者。擇之以爲親王。唯須其後一世早停王号。即賜朝臣。以國家之經用。頗加公謙之篤情。又其号親王者。同母後產。並同畫一。尸鳩之深惠。欲一恩施。司牧之至公。猶從義株。但冀枝分若木。高下共春。派出天。淺深同潤。普告遐迩。令知朕意。』▼是日。定親王八人源氏四人皇子貞固。母橘氏。治部大甫休蔭之女。皇子貞元。母藤原氏。參議治部卿仲統之女。皇子貞保。母女御藤原氏。故中納言長良之女。皇子貞平。母藤原氏。右中弁良近之女。皇子貞純。母王氏。中務大甫棟貞之女。皇女孟子。母藤原氏。兵部

大輔諸葛之女。皇女包子。母在原氏。參議左衛門督行平之女。皇女敦子。与貞保同母並爲親王。皇子長猷。母賀茂氏。越中守岑雄之女。皇子長淵。母大野氏。前石見守鷹取之女。皇子長鑒。母佐伯氏。信濃權介子房之女。皇女載子。與「貞」長猷同母並爲源氏。貫隸左京一條一坊。

▼『三代實錄』元慶二年（八七八）六月二日・『日本紀略』

六月乙丑朔。二日丙寅。勅、以三河国幡豆郡荒廢田一百町、賜孟子内親王、為一身田。

▼『日本紀略』延喜元年六月二十七日
廿七日丁丑。孟子内親王薨。